

### 水田転換畑におけるダイズの小粒化に関する要因

藤井弘志・松田裕之・森 静香・安藤 豊

【目的】ダイズを増収するためには、着生した英に対する窒素等の供給を十分に行うことが重要であり、葉身・葉柄の維持期間が長いことが必要であると指摘されている。近年、山形県におけるダイズの平均収量が低迷し、同時に小粒化が大きな課題となっている。この要因については、①連作による地力低下、②早期落葉、③気象災害（高温、潮風害）等があげられている。しかし、ダイズの早期落葉を想定して、葉身が保有している窒素量と粒径別子実重についての関連性を検討した事例は少ない。そこで、生育時期別に、せん菜処理を行い、粒径別子実重に対する早期落葉の影響について検討した。

【試験方法】1) 供試ほ場・庄内支場（転換2年目）、2) 供試品種：リュウホウ、3) は種日：6/5、4) 栽植密度：畝間75cm×株間25cm（2本立、10.7本/m<sup>2</sup>）5) その他の肥培管理：庄内支場慣行、6) せん菜処理：①成熟期20日前処理（9/16、20日前）、②成熟期15日前処理（9/21、15日前）、③成熟期10日前処理（9/26、10日前）、④無処理区、7) 調査・分析項目：①粒径別子実重、②窒素保有量（子実、茎、英、せん菜した葉身・葉柄）

【結果】①せん菜した葉身・葉柄の窒素保有量は、20日前で3.8g/m<sup>2</sup>、15日前で2.41g/m<sup>2</sup>、10日前で1.39g/m<sup>2</sup>であった。無処理区の成熟期における全窒素保有量に占める割合は20日前で22%、15日前で14%、10日前で8%であった。②子実重（>5.5mm）は、無処理100（257g/m<sup>2</sup>）=10日前100>15日前87>20日前77で、100粒重（>5.5mm）は、無処理100（30.3g）>10日前98>15日前90>20日前76であった。③子実重に占める7.3mm以上の子実重の割合は、無処理で94%、10日前で94%、15日前で87%、20日前で59%であった。